

インドネシア写本研究最前線



海外交流

菅原由美*

Manuscripts studies in Indonesia

Key Words : manuscripts, Islam, history, philology

1. 植民地支配とインドネシア文献研究

インドネシアの歴史は、従来、植民地宗主国言語であったオランダ語によって書かれた史料を元に研究され、叙述されてきた。これは、インドネシア史研究を最初に手掛け、リードしてきたオランダ人研究者たちが、現地語文書の史料的价值を認めず、欧文史料のみを史料としてきたことが発端である。この傾向は、オランダで教育を受けていた初期のインドネシア人研究者に引き継がれ、現地語文書は、史料ではなく、文学として扱われてきた。インドネシア研究者の間で、歴史家はオランダ語文献を読み、文学研究者が現地語文献を読むという分業が長い間おこなわれてきた。

一方、現地語文献の中では、インドネシア諸語のなかで、最も歴史が古く、最も文字資料の多い、ジャワ語文献が文献学者の関心を引いてきた。当時のオランダ領東インド（現在のインドネシア）の統治も、最も人口が多いジャワが中心であった。ジャワ語文献研究は、オランダ人エリート植民地官僚の必修科目であった。しかし、彼らの興味の対象は、イスラーム化する以前の、ヒンドゥー・仏教王国時代のジャワ語文献であった。オランダ人はイスラームをジャワ文化の表層としてしかとらえず、イスラーム文献研究にはほとんど手がつけられなかった。イ

スラーム流入以前のジャワを、「真」のジャワとする考え方は、オランダ人研究者からインドネシア人研究者にも引き継がれ、戦後も長い間この研究傾向は続いた。

2. 東南アジアのイスラーム化とインドネシアの独立

東南アジア島嶼部が明確にイスラーム化の兆候を見せ始めるのは、13世紀であるが、イスラームがこの地域に根付くにはかなりの時間を要した。ジャワではスマトラからだいたい遅れた15世紀からイスラーム化が始まったとされている。その後も長い時間をかけてゆっくりと社会に浸透したと思われる。イスラーム諸文献がアラビア語からマレー語などの現地語に翻訳され始めたのは、17世紀になってからのことである。この翻訳を通して、イスラーム法学や神学、正確なイスラーム諸知識が東南アジア島嶼部に広く伝えられることとなった。各地にイスラーム寄宿学校が建てられ、そこで専門的にイスラームについて学ぶ集団が生まれた。19世紀になると、交通手段の発達と金銭的余裕からメッカ巡礼や中東留学の機会に恵まれるようになり、さらにイスラーム化が進んでいった。つまり、オランダ植民地後期には、東インドのイスラーム化は十分に進んでいた。それゆえに、独立運動のなかで、何を国家の柱にするべきかという議論が生じたときに、その候補として、「イスラーム」も当然、挙げられていた。しかし、インドネシアという国家が誕生したとき、この国家の誕生に対し、大きな貢献をおこなったスカルノを始めとする西欧教育エリートたちは「インドネシア民族」という新たな概念をつくりあげ、一民族や一宗教、また既存のイデオロギーには拠らない国家を作り、「イスラーム」という一宗教は国家存立の要とはならなかった。



* Yumi SUGAHARA

1969年5月生
東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程（2002年）
現在、大阪大学 言語文化研究科
准教授 博士 インドネシア近代史
TEL : 072-730-5270
FAX : 072-730-5270
E-mail : ysuga569@lang.osaka-u.ac.jp

3. イスラーム潮流と写本

しかし、スカルノに続き、インドネシアを30年にわたって支配したスハルト大統領体制期末期、世界的なイスラーム潮流をうけてか、インドネシアでも次第にイスラーム化傾向が顕著なものとなっており、2000年以降、特に若者を中心にその傾向は強まっている。

このイスラーム化の波に乗じて、現在、文献学者はインドネシア各地に眠るイスラーム写本の保護の必要性を社会に訴えようとしている。写本は、17世紀以降、イスラームが東南アジア島嶼部に広められたときの過程を記録している。写本はオランダ植民地期にジャワを中心に収集されたものが主にオランダ、イギリス、インドネシアの専門図書館に保管されているが、民間にもまだ多くの写本資料が保管されているにも関わらず、これらについては近年までほとんど関心が払われてこなかった。また、オランダ式教育を受けた現地の文献学者は、イスラームに関心を払うことが少なかったため、大量に民間に存在するイスラーム写本は研究対象にはなっていない。

そのために、保護が遅れ、一般社会に保管されたままになっており、多くの場合、すでに朽ち始めている。聖なるものとして、誰の目にも触れないように、書棚の奥深くに保管されている場合や、すでに用済みのものとして、ただ放置されているものもある。近年、大英図書館のEndangered Archives Programmeが、インドネシア各地の研究者に呼びかけ、民間で放置されている写本のデジタル化を進めている。さらに、その収集したデジタル画像をウェブに公開し、写本の研究利用を積極的に奨励している。筆者も、2003年東京外国語大学のCOEプログラムで、スマトラの各地の写本の整備、カタログ作成、デジタル化をおこなって以降、スマトラやカリマンタンで写本保護活動が続けている。日本の国立公文書館の協力の下、写本の補修や保存方法についての講習会を、インドネシア各地でおこない、社会が写本を保護していくための意識改革を促す活動をしている。インドネシアは気候が温暖湿潤であるため、よほど気をつけて管理をしていなければ、写本は簡単に朽ちていく。そのため、すでに17世紀の写本は現地にはほぼ残っていない。また、19世紀に増加した西洋紙やインクは大変質が悪いために、劣化

が激しく、却ってダルワン紙などのジャワ原産の紙の方が、保存状態がいいことが多い。しかし、ダルワン紙はそもそも製作に手間がかかり、数に限りがあったため、ほとんどの写本は、西洋紙である。

4. インドネシア文献学者

インドネシアには、植民地時代よりオランダにより教育を受けた写本研究を専門とする文献学者たちがいる。オランダ本国ではすでにかなり前からインドネシア文献学は廃れており、世代交代によりまもなく専門家たちは完全に消えてしまう可能性が高い。インドネシアでは、Masyarakat Pernaskahan Nusantara (インドネシア写本学会)、通称 Manassa が全国に支部をもち、多くの会員を抱えている。この各地の文献学者が英国や日本など各国が提供する写本保護プログラムの実行を支えているが、この文献学者には大きく二つのタイプが存在する。一つは、上述した通り、オランダ式文献学を学んできた文学部（現在は文化学部、Fakultas Ilmu Budaya）出身の学者、もう一つは新しく出てきているタイプで、インドネシア全国に存在する国立イスラーム大学出身者で、イスラーム写本研究を始めた学者である。イスラーム写本の多くは、アラビア語で書かれているため、アラビア語に堪能で、イスラーム諸学の知識がある彼らの存在は貴重である。従来、文学部出身の文献学者は、現地語写本のみを研究対象にしていたため、アラビア語で書かれている写本の研究はまったく進んでいなかった。ただし、イスラーム大学出身の文献学者は、文献学の知識の習得と経験が十分でないために、相互に協力をする必要があるのだが、まだ協力体制が十分には進んでいない。

5. 歴史研究と写本

先に述べた通り、インドネシアの歴史研究には、写本はなかなか用いられてこなかった。しかし、19～20世紀西欧教育を受けたエリート達の活動は、植民地行政文書や新聞・雑誌に記録が詳細に残されていたが、イスラーム指導者達の活動は記録に残りにくかった。抵抗運動を起こしている場合は報告書が作成されたが、植民地政府は普段のムスリムの活動について特別な関心を払っていないため、抵抗運動以外に関する活動についてオランダ語植民地文書から知ることは難しい。写本は、そうした歴史研究

の空白を埋めるため、重要な材料である。筆者は、新たな史料の発掘と整理がオランダ語史料のみに頼る歴史研究の史料的限界を克服する試みにつながるものとして期待しているが、一方で、これまで史料として利用されてこなかったため、写本を歴史研究

に利用する手法はまだこれから検討していかなければならない。写本の保護に忙しくしているだけでなく、これをどのように読み込み、利用すべきかを検討すべき段階にきている。

